



VOL 70

発行 2020 年 9 月 30 日
 公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
 URL ● www.jac.or.jp/doukoukai

連載・古林道 12

根利山古道 ーその3・(記録編)

富永 滋

今回は根利山古道を実際に踏破した記録編として、全文を掲載する(編集者)

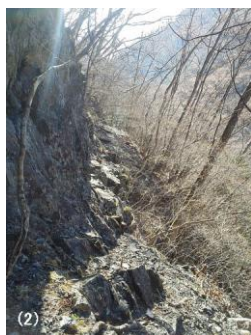
5 【記録】

5-1 ●庚申七滝(一の鳥居上)～赤岩停車場跡

一の鳥居のすぐ奥の、一般車通行止めのため意味がない駐車場先から、庚申川左岸道が始まっていた。初めは庚申七滝の遊歩道なので歩きやすく、右に表参道への連絡路を分け、水面沢を渡った。探勝路はすぐ左に下っていくが、そのまま庚申川右岸山腹を直進するのが、根利山古道である。道は明らかに悪化し、どう見ても廃道の様相であった。岩壁を穿って作設された道は、崩壊せず良く残った部分(写真①)の道幅から見ると牛馬道規格(1.8m幅)であった。岩壁や谷を無視し、約七度の斜度を保って登る道は、地形的にかなり無理のある危険な場所に作られていた。だから一度荒れてしまうと途端に通行困難になるわけだ。古道に入って数分で、栈道が崩落し



たのであろうか、下方に約40mの落差を持つ岩壁のへつりとなった(写真②)。通行者も稀なため、ホールドやスタンスに今ひとつ信頼を置くことができない。しかも登山靴なのでソールのグリップがあまり効かず、ごく僅かにオーバーハングしたへつりの通過は、荷物のぶん谷側に引っ張られ身が縮む思いだった。



岩壁は必ずしも連続しているわけではなく、尾根的な岩稜状と窪的な土砂の部分交互に現れた。その窪状は必ず崩壊しており、踏跡を使って下っては登り返す作業を何度も行った(写真③)。



先の40mの断崖のへつりから約十分で、ルンゼ上端の微妙なバランス

の通過箇所が現れた(写真④)。露岩上のほんの数歩が、グリップの弱い登山靴では恐ろしく、土や枯葉を一步ずつ取り除きながらスタンスを確認しつつ通過した。全体的に厳しい傾斜地なので、高捲きで追い上げられてしまうと下降できなくなってしまうため、うかつに登ることもできなかった。



大小十数箇所の崩壊や危険箇所を、都度の判断で高捲き、下捲きで乗り越えた。たとえ崩壊のため危険であっても道型自体は明瞭で、この区間で道に迷うことはなかった。眼前の急斜面を、カモシカが落石しながら通過した。彼らが漸く通るほどの崖である。赤岩停車場跡までの危険地帯の最後の高捲きは、距離約30mの長いもので、どこで下降すべきか迷ったが、山体崩壊による古道流失の捲きであるため、踏跡に乗って崩壊地トラバースをこなせば難しくはなかった。

赤岩停車場跡が近づくと、多少穏やかな山腹の道になった。そして、突然一辺15～20mほどの三角形の平坦な広場、すなわち砥沢線の赤岩停車場跡が現れた。中継地のことを、古河鉱業の索道では停車場と呼んでいた。ここにかつて赤岩小屋があったといい、恐らく索道の作業小屋であったのではない。設備はすっかり撤去され、敷地のそこそこにある若干のレンガやコンクリだけが人工物であった(写真⑤)。



ここが停車場跡であることは、まだ索道の痕跡が残っていた昭和二十三年の米軍撮影の空中写真を見れば、確認できる。持参した基盤地図情報から自作した126

5分の一地形図(等高線 1m間隔)が示す広場の標高は、1240mであった。

○ 一の鳥居-(5分)-遊歩道を離れる-(1時間)-赤岩停車場跡

5-2 ●赤岩停車場跡～1317独標北東鞍部

停車場跡からも一定ペースで登る峠道が続いていた。次第に山腹からの崩土で道が埋まり、道型を追い難くなってきたが、岩稜帯が終わり転落の危険は減少したので、概ね歩みは順調になった。唯一、停車場跡から百米ほど進んだ浅い窪状斜面の崩壊通過で、滑落到神経を使った。

その後も崩壊は頻発したが、どれも容易に渡れた。赤岩停車場跡までが大変だったぶん印象が薄い、危険なトラバースが続いた。だがそれまでの岩壁と違い、捲く気になれば上下とも可能である点、だいぶ気が楽であった。倒木と落石で荒れた浅い窪を横断すると、1317独標の北東鞍部(1296m)であった。独標はモミとツガに覆われた美しい小峰で、ここまでのミズナラなど広葉樹林を見てきた目に、亜高山帯の森林らしい清々しさが感じられた。

⑥ 赤岩停車場跡-(20分)-1317独標北東鞍部

5-3 ●1317独標北東鞍部～樺平(1482独標)

この区間は別の日の記録を使用している。冒頭からやや長い余談となるが、道は、独標北東鞍部先の二連涸窪通過部の荒廃で消滅し、ほんの一瞬道型が見えるもその後大崩壊で再び消滅する。次の巨岩で荒れた窪の右岸から次第に道型が見え始めるが、この間百数十メートルがほぼ途切れており、しかも紛らわしいことに、約七度の一定勾配で付いた道は、計算上その間十二、三米上がるはずの所、ほとんど登らないのである。四月二十日訪問時、崩壊の捲き踏跡が上下両方に付いていて、下の方がしっかりしていることを認識していたが、道の付き方からして上を取るべきと上の捲き踏跡に入った。するとその踏跡は不安定ながらも樺平付近まで続いており、道型の様に見える部分もあったのでそのまま進み、その足で六林班峠を往復した。樺平に戻り、庚申山荘へ向かおうとするも残雪で倒れた笹のため道が見つからず、捜索して見つけのが、山荘への道ではなく、樺平から銀山平に直接下る旧道であった。この道は樺平付近では庚申山荘への道よりも良く、始め庚申山荘への道と思い進むも、方向や傾斜が違い、すぐこれが旧道の可能性があると感じた。下り始めたものの、日没が近づき時間切れとなったため、一軒弱の区間を歩けず残してしまった。山中ではGPSは使わぬと自己ルールで決めているので、たしかにそれが旧道と確認したのは、帰宅後GPS記録を地形図に乗せたときである。残った部分を、記憶している周囲の状況が変化しないうちに翌週歩き直したのが、この区間の記録の日付が異なる理由である。

1317独標北東鞍部の先が倒木でちょうど塞がれ分からなくなっていたが、道は尾根を回り込みながら登っ

ていた。ツガとミズナラの混交林を緩やかに登る楽な道(写真⑥)がしばらく続くも、倒木や流れてきた岩で



荒れた二連の涸窪で、完全に消滅した。水平に通過し、いったん道の気配が復活するも、次の大崩壊で全く通行不能となった。左下の涸窪へと導く踏跡で斜めに下り

り、伏流となった天下見晴直下の小窪を登って高度を回復した。窪を塞ぐ巨岩下の水流が見える付近から、小窪右岸に取り付くと、少し先で道型が回復した。この付近、百数十米の間不明瞭であり、しかも登りを止め水平になるので、迷いやすい区間であった。

古いサイダー瓶らしきを見ると、道は良悪を繰り返しつつ、長い連続崩壊帯を通過した。道の痕跡が断続的に現れるので、古道歩きに慣れてさえいれば迷うことはなかった。緩い窪状左岸の突破困難な崩壊を、約十米の下捲きで通過した。その時、古そうな何か赤いやツケのようにも見える物体(恐らくゴミ)を見た。赤岩沢が近づくと、左岸斜面が、崩壊・落石・倒木でズタズタに途切れていて(写真⑦)、下捲き踏跡でいったん沢



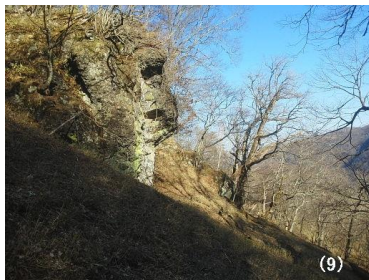
に降りて通過した。

この区間で随一の水量のある顕著な赤岩沢を、1343m付近で通過した。すぐ上に立派な二段八

米滝(上2・下6m)が架かっていた。左岸でも道が流されていたが、踏跡を辿るとすぐ回復した。この後は大きな問題はなく、不明瞭だったり、場所によっては一時消滅した部分もあったが、倒木や薄ヤブに惑わされず一定ペースで登る道型の痕跡を追えば良かった。低いササが出ると樺平の一角のすぐ下方を掠め、ツガの森を倒木を越えて進むと、顕著な赤岩沢右岸尾根を1375m付近で回り込んだ。その部分で道は倒木やヤブに隠れていたが、注意深く道型を追えば失うことはなかった。この尾根を登る明瞭な踏跡があるが、これを辿ると、次第に不明瞭になりつつも庚申山荘への道に出ることができる。

低い笹に覆われた尾根を倒木が詰まった切り通しで廻り込み、笹の中の傷みは酷いが明瞭な道型で緩く登った。唯一の崩壊箇所の上端を、問題なく通過した。低い笹原の踏跡は時に不明瞭になった(写真⑧)が、道に迷うことはなかった。反対側から見ると人の横顔

のように見える大岩の下を過ぎ(写真⑨)、緩い窪を回ると、ブナやミズナラにダケカンバが混じるようになり、いよいよ樺平の一角に乗り上げた。皇海山や、六林班峠の凹みがはっきりと見えた。



開けた地形になるに連れ、道は不明瞭になって微流の左岸に沿う様になり、左手が完全に平坦な笹原になった。樺平である(写真⑩)。これと言った目印はないが、庚申山荘から六林班峠へ向かう道が下り切った底になる地点である。今やモミやブナが優占しており、地名の由来となったダケカンバは道の右手、上の方に多く見られた。古道は、庚申山荘からの登山道に合流する直前数十米で、笹に隠れて不明になっていた。その付近でみたサイダーの空瓶(写真⑪)に、微かに「金線」の文字が見られた(すなわち金線サイダーの空瓶)ので、大正十四年以前の通行人が捨てたのだろう。昭和十九年に長谷川末夫が見た二の鳥居は、どこにあったか全く見当がつかなかった。



⑨ 1317独標北東鞍部-(20分)-赤岩沢-(10分)-赤岩沢右岸尾根-(15分)-樺平

5-4 ●樺平(1482独標)～六林班峠

この区間は一般道とされている割に悪く、踏跡程度の悪路であった。若干の道標、危険箇所の栈橋、数ヶ所のロープがあるも、熟達者向けコースの印象だった。

逆に言えば、多少は古道歩きの雰囲気味わえるコースとも言える。

樺平付近は、ササ原にダケカンバが目立つ明るい高原状であった。点在する残雪により、道が埋まり、笹が倒れ、ルートを探むのに気を使った。山腹のトラバースになると、古道の道型は笹に埋もれ、その数十センチないし一、二米脇に踏跡が付く奇妙な状態が続いた(写真⑫)。



踏跡は細く不明瞭かつ斜面のため傾いており、古道の笹ヤブを漕ぐ方が楽な箇所もあった。

ミオ沢流域に入ると、残雪が深くなった。岩場の通過は、栈橋とロープで安全

に整備されていた。ミオ沢で個人が付けたいらしい「ミオ沢」という妙な手書きプレートを見たので、帰宅後調べると、最近ではミオ沢という明らかな誤記が蔓延しているようだった。日本山岳大系の頃までは「ミオ沢」だったが、ネットの時代になって以後、出版物も含め、フェイクニュースのように誤りが広まったようだ。恐ろしいものである。

境沢が近づく、積雪がみるみる深くなった。薄い表面はクラストしているが中はジャリジャリと柔らかく、新雪のラッセル以上に厄介な、踏み抜きながらのラッセルが続いた。完全に踏み抜くと裕に股下や腰まで潜り容易に抜けられなくなるので、踏み抜かぬよう一歩ごとに足場を固めてから進むという二度踏みで歩いた。山腹では1m以上の積雪でも木や枝の位置で道筋が推測できたが、沢や窪を渡る部分では全く分からず、その都度道探しに苦労した。積雪期用の立木の幹の高い位置に取り付けられた赤黄二色の標識やピンクテープのマーキングがなければ、道を失ったかもしれない。

境沢は沢の合流点を渡っているらしく、クレバスに加え水流にも落ちるなど酷い目にあった。四十一年ぶりの通行で、夏道の位置など全く覚えていないから、渡れそうな場所を勘で探すしかなかった。境沢を渡る前後から再び峠道は傾斜を取り戻した。フワフワの深雪に嵌まり腰まで落ち込んでしまうと、うかつに身動きが取れず、時にはそれが傾斜地だったりして、膝から下が固定された状態で斜面に宙吊りになった時もあった。やがて針葉樹の森を抜け、無流木地に入ると、峠まではあと一息だった。

六林班峠には、明大ワングルの青いプレートを始め、多くの表示板が取り付けられていた(写真⑬)。足尾側は銀山平方面の谷が望め、上州側はササと疎林の斜面が広がるも、深雪のため道の状態はわからなかった。

一段高いところに登ると、谷川岳から苗場にかけての白銀の連なりが見えた。この区間、特に後半の腐った雪のため異常に時間がかかり、休憩を除いた正味で約二時間五十分を要した。

④ 樺平-(2時間50分、無雪期なら1時間30分程度と推定)-六林班峠

5-5 ●六林班峠～砥沢小屋(根利栗原川林道)

六林班峠から砥沢小屋までの区間は、車道から容易に国境稜線へ到達できる便利なルートであり、明瞭な道はないながら多くの人に歩かれている。明治三十年代頃に古河鉱業により伐採されたこの一帯は、昭和五十三～五年の間に沼田営林署により再伐採された。それに伴う作業車道の造成や森林の攪乱により、新たな道が開拓され、古道は激しく損傷を受けたようだ。このため現在、古道と植林作業道とが入り乱れ、古道の道筋を辿ることはかなり難しくなっている。以下は、できるだけ植林道に惑わされず、古河時代の峠道を追いかけた記録である。

鉄索の砥沢本線を通していた六林班峠は、未だに高木の少ない笹原のままで当時の名残を残していた(写真⑭)。

言うまでもなく、庚申山荘から六林班峠を経て鋸山へと向かう一般登山道は、峠の近くまで行くが峠を経由しておらず、真の峠の位置は、国境稜線上である。明大ワングルの古い青プレートのある最低鞍部の、笹に埋もれた小溝が峠道の残骸のようだ。ごく緩い下りで低い森を百数十米進むと、不明瞭な峠道は急に右に切れて、山腹を斜めに下るようになった。道自体は見えかかっているが、索道建設時の資材運搬に使った牛馬道なので、道幅が広くどうにか判別できた(写真⑮)。さらに二百米ほど行くと、腰までの笹に覆われた疎林で、道が消えた。斜面には多くの溜れた水跡が付いて、古道は流されてしまったようだ。丹念に道の断片を繋ぎ合わせると、どうやら大きな折返しを一度交えて、なおも右斜の下降を続けていることが分かった。



(13)



(15)

ロクリン沢の源頭が近づく頃、古道とは思えぬ幅広い明瞭な廃道が、左後方に分かれて下るのに出合った。試しに少し下ってみたが、どうもこの道は、鉄索時代の

原動所の方に向かって伐採跡を下る作業道のようなだった。六林班峠からここまで古道の道筋通りの営林署歩道は、ここで古道を離れ、植林地を通して砥沢林道終点へと続いているのである。

この分岐から数十米行くと、ロクリン沢の右岸沿いに笹を分けて下る不明瞭な道型が見えた。これが原動所経由で下る、峠道のサブルートである。本道は、水のないロクリン沢源頭を右岸に渡り、山腹を絡んで下ってから一度大きく折り返し、原動所下方の1560二股上で流れに下り着いていることが、旧版地形図から知れる。峠道は原動所を通らず、一旦分かれた原動所道は下方でまた峠道に出合うのである。また峠の下には索道事務所があったとされ、中村は峠から1.5軒20分の地点としている。資料により記述は様々のため、位置関係は今ひとつはっきりしない。

あやふやな道型はなおも斜めに下るも、次第に森林が薄くなり、反比例して笹が高くなってきた。やがて深い笹原で完全に消えてしまった(1650m付近)。足先で探ると所々に小さな水流跡が感じられたが、急斜面をトラバースしていたはずの峠道の痕跡は全く分からなかった。この斜面にカラマツが再植林されたのは昭和五十六年とされるが、実際に植林されたのはごく一部で、大部分は根付かず笹原となっている。解像度の高い空中写真には、古道が通過していたはずの部分に道型的な痕跡が見えるが、植林以前からあったものか判断する術がない。平成四年に登った石井氏は、この斜面上方に道型的なものを見つけ、ヤブを漕いで登ったところ、旧道的な痕跡を見つけたという。やむを得ずロクリン沢の右岸約十米上に付いた古道まで、笹の急斜面を適当に下った。古道は1590m付近まで沢沿いに何とか続いていることから、そこから右岸の笹原に取り付いているものと想像された。

しばらく右岸のやや高い位置の笹原に、多少ぼやけているが安定した道型が続き、1560m圏二股は、直接見えないまま通り過ぎた。左岸が崖状になると、道は笹の中で曖昧になり、沢に下っているようだった。右岸が崖で通れなくなり、逆にその先で左岸の傾斜が緩むことから、この1505m付近で沢を渡っていることが確信された。一帯は伐採後の手入れが悪く、かなり荒れた雰囲気だった。約30m上には、伐採時に使われた作業車道(砥沢林道)の終点があり、恐らくそこから



(14)

来ていたであろう支線車道の断片が、左岸斜面に断続的に見られた。砥沢林道から分かれるこの左岸支線車道跡も一見便利に歩けそうだが、突然崩壊して消えてしまうので当てにできない。

峠道は右岸が急に落ち込む部分を過ぎると、また右岸に戻って笹の斜面を下っていた(写真⑬)。



山腹の道は小さな支線的な地形が現れるとその底を行くようになり、水が現れると渡り返して絡むように下った。小尾根と小窪が入り組む地形は複雑で、基盤地図情報から起こした二千分の一程度の詳細地形図でないと判断に苦しむところである。自然と本流の右岸に戻ると、1420m付近で木製の堰堤が行く手を塞いでいた。

ここから根利栗原川林道の砥沢小屋までは、傾斜が緩いうえ沢に削られ、造林や車道工事の影響が強いため、古道がほぼ消えているようだ。地形的にもまた旧版地形図から見ても、古道はロクリン沢の左岸に渡った後、山腹を横切って支流のロクリン沢右股に移っているようであった。しかしその辺りの道型は、工事と植林踏跡とに紛れてほぼ消えていた。現在多少踏まれているのは、堰堤の上で左岸に渡り、約十米急登して中間尾根を越え、伏流した右股を横切り、その右岸に付いた作業道的な酷く荒れた道型に乗る方法である。道型は車道(根利栗原川林道)と交差し、そのまま砥沢へ続いている。

⑬ 六林班峠-(25分)-原動所道上の分岐-(30分)-原動所道下の分岐-(10分)-1505M 付近渡渉点-(30分)-砥沢小屋

5-6 ●サブルート:権兵衛原動所道(実際は逆コースで通行)

六林班峠から来て、ロクリン沢を渡らず左岸に沿って下るのが、原動所道である。峠道自体がもはや曖昧なので、分岐もまた曖昧である。この道が脚光を浴びたのは、昭和五十年代前半の伐採で営林署の道が原動所の尾根にできたことがきっかけと想像され、昭和五

十年代に岡田氏はよく利用していたという。平成十三年の高桑氏も権兵衛経由で登り、十六年に通った増田氏も躊躇せず原動所道を下っている。峠道に捉われずただ便利に通行するには、近年はこの道が定番となっているようだ。

道はロクリン沢源頭の左岸の高い位置を、明瞭かつ直線的に下っていた。笹は低く、古道は安定して割と歩きやすかった。形の不明瞭な尾根を回り込む様に左に旋回すると、権兵衛原動所跡に辿り着いた。峠の少し下にまで及んだ全山の伐採事業は、ここだけを切り残して小さな森になっていた。理由は不明だが、もしかすると営林署も歴史的な重みを感じ伐採を躊躇したのだろうか。昭和二十三年の空中写真では、笹に覆われた50×20mほどの平坦で長細い敷地全体に、まだ施設の残骸が残っていた。現在残っているのは、敷地周囲の石垣と、中央付近の櫓のような木組みだけである(写真 17)。小雨の水滴を弾いているのは木材を防



腐剤のクレオソート油で処理したためと見られ、例えば杉材では三十六年以上の耐用が可能というが、条件次第では八十年以上経過してなお実用にある例も報告されている。この高さ数米の櫓状は、スキリフト終点の索道動力装置のようなものであったと想像される。違いといえば、ここ

が最高地点でなく山腹であることだ。重い木材を引き上げるのだから六林班峠の頂上が理想と思われるが、当時の技術ではコンパクトな施設を作ることができず、できるだけ頂上に近い平坦地としてここを選定したと想像される。ブライヘルツ式の複線自動循環式索道は、ここでいったん平坦になり、施設内で約三十キロワットの動力を与えられていた。増田氏によればこの一角に根利山会が建てた記念碑があるというが、特に注意していなかったのが気付かなかった。

深い笹の痕跡を水平に尾根まで出ると、見張所か何かの跡と見られる小広い敷地があり、瓦礫となった明治時代の煉瓦が



散乱していた。珪土を含む白い耐火レンガも混じっていた。SHINAGAWAの刻印から、有名な品川白煉瓦(株)製であると知れる(写真 18)。

多少細くなってきた尾根上の、明瞭ながら笹深い痕跡を漕ぎ下ると、一度小さく左に折り返しを入れた後、傾斜が急になったところで明瞭な道型が消えた。小さな踏跡が三々五々様々に下っていたが、尾根の右側、すなわちロクリン沢右岸の踏跡に、多少道らしき面影を見たので、それを拾いつつ斜めに下った。

踏跡がロクリン沢に降り立って右岸に渡ると、そこで正道に合流した。

② 原動所道下の分岐-(15分)-権兵衛原動所-(15分)-原動所道上の分岐

5-7 ●砥沢小屋(根利栗原川林道)～砥沢

営林署(森林管理署)の砥沢小屋は、薪ストーブもあり、四、五人が泊まれる広さだった(写真19)。

小屋の対岸、直下にあるロクリン沢1365m二股右俣の橋の左岸のダケカンバの幹に赤スプレーで吹き付けられた、「とざわ」の表示が痛々しかった。緩く下る幅広の荒れた牛馬道はすぐ踏跡程度になったが、作業道としてであろうか、よく踏まれていた。岩壁下の急斜面を過ぎ、涸窪の通過で一時道が消えたが、ヒノキ植林の間を行く細い踏跡は確実に続いていた(写真20)。生育状況から二十五～三十年生くらいに見えたが、表示札には昭和五十五年の植栽とあった。古道上にも容赦なく植えられているのを見ると、植栽当時にもはや立派な古道の面影はなかったようだ。時折小さな踏跡が分れるも、一定斜度で緩く下る古道の付き方が判れば迷うほどではなかった。微小尾根を一瞬登って越え、微流の小沢を二股上で渡った。その渡沢部で道が消えていた一方、小尾根回る辺りは古道が見事に残っていた。古いロープを渡した小崩壊を通り、植林帯をひた下った。

急に下り勾配が強まった。溝状の古道跡には間伐木が詰まって歩き難く、脇を歩いた。道荒れが酷くなり、ロクリン沢目掛けて右に下る小さな踏跡を見ると、崖上の急斜面の斜めに傾いた踏跡となり、すぐに手が付けられない程の大崩壊に行手を阻まれた。山体が深く垂直に抉れており、全く通過の余地はなかった。上下いずれの捲き踏跡を取るにしても、高さ数十米分のアルバイトになろう。直前を沢に下る踏跡は、専念寺砥沢説教所から釣橋で沢を渡って登って来る町内道だが、今は橋を釣っていた鋼製ロープが残るのみのためロクリン沢を渡渉する必要がある。渡った後の右岸は



歩きやすいが、全ての橋が落ちていたため砥沢へは再渡渉が必要となる。そのためか、最近のブログ等の記録を見る限り、この踏跡を下って沢に達し、左岸の崖下を適当に歩いて砥沢に入る方が多いようだ。

峠道を辿るため、高捲きの微かな痕跡に入り、大崩壊の縁を登った。やがて崩壊上端を通過する踏跡が見つかった。崩壊対岸のカラマツ植林に移り、下り返すと、古道の続きがあった。すぐ傾斜が緩まり、何となく砥沢集落の上端に入った雰囲気になったが、カラマツがびっしり植林され道型はほぼ失われていた。多くの整地が見られたものの、建造物の残骸や廃棄物はなく、道も植林のためすっかり消えていた。この一角に不動沢線の駐車場があったはずだが、スキーリフトの頂上小屋の様に自然地形を生かした物だったと見え、痕跡は見られなかった。

さらに距離にして百数十米も尾根上を緩く下ると、石垣状の基礎を持つ明確な敷地がある一帯に入った。まるで宅地開発用に山を切り崩して造成した、建築前の建物のない敷地のように見えた。その一つに、ポツンと古い木の柱が立っていた。近寄ってみると、九八・九九林班界標の木標だった。木標は昭和三十七年の「国有林野測定規程」で実質的に禁止されたので、それ以前のものであろう。その前を、村内の上段水平道の明確な道型が横切っていた。標高1180mのこの地点は、砥沢の事業地区(ロクリン沢側)と居住区(八林班沢側)を分ける背骨のような尾根の付け根に当たっていた。

ここから下に植林はなく、尾根の左側斜面に古道の道型が残っていた。それを百数十米下ると下段水平道に出た。古い石垣の切通しが、八林班沢側の住宅街らしい一帯とロクリン沢側の作業場らしい一帯とを結んでいた。峠道が下段道に降りる寸前、右に分かれ尾根に乗る小道が山神社へ続いていたはずだ。それは切通し上で途切れていたが、往時は橋がかかっていた、それが山神社への道だったのである。道理で山神社への道が見当たらないはずである。

□□ 砥沢小屋-(55分)-砥沢

5-8●砥沢町内散策

切通し先の高さ数米だけ小高くなった場所に祀られた山神社(写真21)には、奉納された新し目の左右の石灯籠、昭和四十七年に設置された、根利山会の銀に輝く利根の記念碑などが置かれていた。少し



先が神社下の切り通しである(写真22)。その上を渡していた橋が落ちた今、神社へ上がるには切通脇の踏跡を使うことになる。



神社下の切通しの

ハチリン沢側にある軌道跡の立派な下段水平道は、下流側、上流側とも短く、本来伐木移動用の作業軌道や土場があった場所だ。ハチリン沢側山腹に付いた銀山平への峠道を登ると、右手のハチリン沢との間に次々と広大な敷地が現れた。この辺りは事業に関連する下請け会社の社宅群であった。町の大きさに割に痕跡が少なく感じられたが、社宅街には廃村となった昭和十四年以前の瓶や廃棄物の破片が若干見られた(写真23)。



上段水平道の木標の林班界標まで登った地点で、尾根を行く峠道を見送り、右に入ってみた。上段道は、なお社宅群の敷地に沿って進み、次に広大な小学校跡となった。学校を思わせるものは何も残っておらず、銀色の小さな記念碑だけが唯一の印であった。その一段上まで来ると山が迫り、道が途切れた。役宅が建っていた町の最奥部である。室に使われていたらしいコンクリートのアーチが残っていた。

林班界標まで戻って、上段道をロクリン沢側に回ってみた。道は数十米先の広場で行き止まりになっていた。平河線の停車場跡である。後から建設されたため、狭い町の高い場所に追いやられていた。そこから急な支尾根上の踏跡を十数米登った植林中の台地状が、不動沢線の停車場跡である。もはや、何かよくわからない森の中の小さな平坦地といった感じであった。林班界標まで下る峠道は、時々道の痕跡を感じるが、緩やかな地形と相まってどこが道か分からぬほど自然に帰していた。

平河線停車場に戻り、辛うじて石段が残る町内道で河岸近くの事務所向かった。この石段は、町が栄えていた頃、恐らく八丁峠へ向かう道の途中で撮られた写真に、印象的に写っている。緩く下って、ロクリン沢に沿う崖の上に建つ事務所跡に出た。根利山の営林事業全体を束ねていた根利林業所の洒落た建物も、今や草や灌木が茂るただの平地になっていた。越し方を振り返ると、ついさっき脇を下ってきた辺りに、城跡を思わせる二段の立派な石垣が見える(写真24)。下段は恐らく大工小屋があった場所、上段が円覚線の



停車場跡である。円覚線や平河線で運ばれてきた伐木は、砥沢本線脇の土場に落とされ、積み替えて銀山平へ運ばれていたことが、土場に山と積まれた収

穫物を写した当時の写真から推測される。その砥沢本線と土場のあった位置も、低く疎らな灌木と草に覆われた、ただの広大な敷地であった。コンクリート槽を見る程度で、ほぼ何も残っていなかった。

砥沢本線停車場跡を西端まで行くと、山神社の下に戻る。この砥沢本線跡から、事務所の下を通過して二本の道が出ていることが、往時の写真で分かる。ロクリン沢左岸の崖上に位置する一帯は侵食が進み、駐在所(現在の皇海荘の位置)前を通過して平滝へ通ずる幹線歩道はそこで途切れていた。仕方なく事務所跡から多少の段差を適当に下って、皇海荘の前に出た。道は駐在所の敷地脇を掠めて緩く下っていたが、その部分十数米だけ道型が残っていた。立派な橋をかけてロクリン沢を渡っていたのだが、恐らく木橋であったのだろう、一帯は完全に失われ痕跡すら残っていなかった。

皇海荘は、敷地を森林管理署から借り受け、根利山会により昭和五十五年(1980年)に建設された小屋である(写真25)。ちょうど営林署の伐採が盛んだった時期であり、



開設された林道と、伐木運搬用の索道を使って資材を運び込んだという。供養に訪れる旧住人の墓参用の小屋だが(写真26)、一般にも開放されているのできれいに使いたい。年月が経ち、既に組織的な墓参は途絶えて久しいという。だがまだ一部遺族の墓参や、釣り人に利用されていると思われ、布団、記念品の搬器のローラー、時計、食料、ストーブを



始め、様々な備品が据え置かれていた。

駐在所の敷地上に沿って小径が残っているのが分かる。一段上の鍛冶屋(索道設備工場)跡を通り、釣橋でロクリン沢の右岸に渡り、沢沿いに進んで、専念寺説教所の下で、六林班峠からの峠道から分岐し釣橋で渡ってきた道に合流する道の跡である。鍛冶屋先の釣橋跡と思しき位置にワイヤーの残骸を見たが、沢に沿う部分の道型はほぼ流失していた。この道は恐らく根利山会の墓参道だったと思われる。小屋開設当時、

すでに往時の道は使えない部分が多かったと思われ、植林作業道を利用したり新たに整備するなど、区間によっては峠道とは別に墓参道を整備したという。墓参ルート詳細を明記した資料は目にしていないが、同行した高桑氏の記録と根利山会の設置物から、ある程度推測できる。根利栗原川林道の栗原川雨量観測所から、1424米独標下まで支線林道が伸びている。その終点から尾根に絡んで八丁峠まで緩く下り、八丁峠から小沢沿いに砥沢へ下る峠道の崩壊箇所二ヶ所をつど回避し、峠道が慰霊碑のやや近くを通る部分で踏跡に入り、慰霊碑、寺跡を経て一気にロクリン沢まで下り、鍛冶屋跡下の釣橋位置で沢を渡って、先の小径で皇海荘に達していたというのが、一つの見立てである。

ロクリン沢の右岸へは、全ての橋が流失した現在、渡渉となる。平水なら靴を濡らさず何とか渡ることができる。鍛冶屋先の釣橋跡付近を投げ込んだ倒木を足場に渡った。付近は五十米ほどの広い川幅があり、水流が左岸側に寄っているため、右岸の川岸までしばらく荒れた河原を歩いた。河岸は草木に覆われどこから取り付けば良いか分からぬ状態だが、しっかり搜索するとちょうど寺跡の直下に根利山会のものと思しき「八丁峠登り口」の小さな標識があった。墓参道の入口であろう。ヤブがちな森の中に唐突に貼り付けられていた。

踏跡を一登りすると右岸台地に出て、小規模な住居群の敷地があった。小径の右側が寺跡であろう。現在この上が植林地のため、幾つもの作業道が登っていた。枝打ちで埋もれがちな直上する不明瞭な道を取ると、標高差で約35米登った植林中の傾斜がゆるい場所に、「南無阿彌陀佛」と刻まれた一基の墓石のようにも見える慰霊碑があった。砥沢には墓がなく、帰る宛てのない無縁仏はここを火葬場として荼毘に付された。傍らの大木の倒木は、砥沢の御神木とされた檜の木で、雨の日だったりするとその大きな洞にこもって交替で夜通し焼いたという。それを「檜の木の下に行く」と言い習わす古老がいたという。彼岸の三連休の中日というのに墓参の形跡はなく、人の往来が絶えて久しいことが伺われた。墓参道は、杉植林を左寄りに斜上し、更に20米上の1235米付近で、左前方から来て右後方に登る峠道に出合った。その峠道自体、以前通ったから分かるが、初見では判断がつかぬほどの荒れようであった。

寺跡まで戻り、ロクリン沢右岸の崖上を水平についた道で下流側へ向かった。道は削られてだいぶ怪しくなっているが、道型の痕跡や石積み跡でここが歩道であったことが知れる。八丁峠から来る小沢の手前で峠道に出合うが、峠道も微かに道型らしきが見える程度であった。その小沢を伏流部で渡ると、眼前が崖状に迫り、峠道は左の急斜面を沢岸に向かって折り返し下

っていたようだ。やむを得ず傾斜地を沢近くの高さまで無理に下ると、そこから土手のようにきれいに石積みした歩道が下流へと伸びていた。これは沢近辺が完全に消滅した平滝道と分岐する、山神社へ続く歩道である。

直線的な石積みを進むと、八丁峠からの支沢を橋が落ちて橋桁だけが残る箇所を渡って、小規模な住宅地に至った。春に訪れたとき、庭先に咲いていたであろう水仙が、今なおきれいに咲き並んでいるのが印象的だった(写真 27)。ここを直進するのが源公平道だが、もう道の在り処は定かでなかった。山神社へは左に急旋回し、見事に残った釣橋の二本のワイヤーの下を渡渉、



対岸の急傾斜の道の痕跡を拾いつつ登ると、一度折り返してから山神社下の切通しの前に出た。

以上が、砥

沢の今に見る全貌である。だが全盛期の砥沢には、千人は下らぬ人が住んでいたと推測される。人口に関する確かな統計はないのだが、合理化で人口が減少した大正十四年の時点で平滝、津室等も合わせた事業区域内の全従業員が829名とされている。このことから、明治末期には根利山全体で、家族を含めると数千の人口があったと推測されることが根拠である。人々を支える生活物資は、足尾の銀山平からこの索道で運び込まれ、支線に積み替えられさらに奥地まで配送されていたようだ。だから新聞の朝刊を夕方には砥沢で読むことができ、「あんな山の中なのに正月が近づくと、大箱に入った塩鮭がどんどん届いた」と言われるほど物資は豊かだったという。(完)

おわりに

〔謝辞〕

渡辺真一氏には、六林班峠～砥沢の行程をご同行頂き、また写真数点を拝借させていただきました。厚く御礼申し上げます。

連載 古林道 根利山古道 は

その1 AGC レポート vol-68

その2 AGC レポート vol-69

に掲載されています

AGC レポート vol-70 2020 年 9 月 30 日発行

発行：公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ

〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会 気付

TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441

編集担当：近藤 E-mail: yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp